

平成29年度
入学試験問題

国語

2月1日 第1限

仁愛女子高等学校

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

しよつちゅう散歩をする。しかし、ふと考えた。「散歩」とはなんぞや？

歩けば散歩になるというわけではない^①。目的地への移動のために歩くのでは、散歩とは言えない。「目的なしに歩くこと」と言いたくなるが、目的がないわけでもない。カンベキに無目的だと、「徘徊^②」と呼ばれかねない。

「散策」と「散歩」は違うのだろうか。うーむ。ビミョウである。あくまでも私の語感だが、散策というのは、あるエリアに関心があり、そこを観察したり楽しんだりするのにうろろ歩くこと、という感じがする。「庭の [A]」は、「庭を [B] する」という場合よりも庭に対する関心が強いのではないだろうか。あるいは金閣寺から龍安寺を経て仁和寺まで観光しながら歩くことを「[C]」と呼ぶのはよいと思うが、これも歩くことよりもそのエリアへの関心が勝っているので、私としては「[D]」とは呼びがたい。

それに、「犬の散歩」とは言うけれども「犬の散策」とは言わないじゃないですか。やっぱり、散歩と散策は違う。散歩は、散策よりもずっと歩くこと自体を楽しむものなのだ。

とはいえ、だからといって、「陸上競技場のトラックを十周ほど散歩しました」とも言えそうにない。歩くことを楽しむとは、左右の足を交互に出す運動を楽しむ^③ということではなく、そこで見たり聞いたり感じたりすることを楽しむことと結びついている。

散歩のときには、予期しない偶然^④のものと気持ちを開いていなければいけない。特定のこと心に心を奪われてはいけな^⑤い。ささやかなものごとに対する感受性を鋭敏^⑥にしておく。

さて、そうだとすると、「散歩」を定義するとどうなるのか――。

と、というようなことを歩きながら考えたのだが、おかげで散歩とは言いがたいものになってしまった。^⑦ [E]、ポケットには万歩計を忍ばせていたりもするのだから、ますます散歩としては不純である。

(野矢茂樹『哲学な日々―考えさせない時代に抗して』による)

問一 二重傍線の部分ア「カンベキ」・イ「ビミヨウ」を漢字で書け。

問二 空欄〔A〕〔D〕に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものの記号を書け。

- | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | A | 散歩 | B | 散策 | C | 散歩 | D | 散策 |
| イ | A | 散歩 | B | 散策 | C | 散歩 | D | 散歩 |
| ウ | A | 散策 | B | 散歩 | C | 散策 | D | 散歩 |
| エ | A | 散策 | B | 散歩 | C | 散歩 | D | 散策 |

問三 空欄〔E〕に入る言葉として最も適当なものの記号を書け。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ア | しかし | イ | しかも | ウ | だから | エ | そこで |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|

問四 傍線の部分①「ない」と同じ品詞のものの記号を書け。

- | | |
|---|--------------|
| a | 呼ばれかねない。 |
| b | 言わないじゃないですか。 |
| c | 言わないじゃないですか。 |
| d | 予期しない偶然のものと |

問五 傍線の部分②「目的がないわけでもない」とあるが、散歩の目的とは何か。解答欄の「〜こと。」に続くように、文章の中から十字で抜き出し、そのまま書け。

問六 傍線の部分③「そこ」が指す箇所を文章の中から五字以内で抜き出し、そのまま書け。

問七 傍線の部分④「偶然」の対義語を漢字二字で書け。

問八 傍線の部分⑤「鋭敏」と同じ構成（組み立て）の熟語として最も適当なものの記号を書け。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 移動 | イ | 左右 | ウ | 特定 | エ | 定義 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|

問九 傍線の部分⑥「おかげで散歩とは言いがたいものになってしまった」とあるが、その理由を文章の中の言葉を用いて、二十二字以上、三十字以内で書け。（句読点を含む。）

二一 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

島の建楽寺で合同葬儀が取り行なわれた。

誠吾(せいご)は周一郎と葬儀に参列した。

(修平の担任)

修平は参列者が焼香をする間もずつとうつぶむいたままでいた。

(小笠原)

美作重太郎が最後に挨拶をした。重太郎の挨拶が終ろうとした時、

(葉名浜の網元)

「父ちゃんは、死んどらん」

と大声が響いた。

修平だった。さきこが修平を抱きかかえた。修平はその手を払って、重太郎の前に駆けて行くと、

「父ちゃんは死んどらん。葬式なんかするな。なんで父ちゃんを海に置いて皆戻ってきたんじゃ」

重太郎が目をむいて修平を見た。

「父ちゃんはこの島で一番強い漁師じゃ。父ちゃんが死んだるはずはない」

修平は数珠を重太郎に投げつけた。そうして素足のまま寺の御堂を駆け抜けて門の方へ走って行った。

「修平、修平」

さきこが修平を追い駆けて、御堂の階段から名前を呼んでいた。

「好きなようにさしときなさい」

よねがさきこに言った。

(誠吾の下宿の大家)

誠吾は修平の後を追った。

修平は建楽寺から棧橋へむかう坂道を一気に下りて行く。誠吾は修平のうしろ姿を追い駆けながら葉名浜の磯へ出た。

修平は葉名浜に立つと、

「父ちゃん、父ちゃん」

大声で叫んだ。

島のほとんどの人は葬儀に出て、葉名浜には誰もいなかった。夏にむかう海はオダヤカデ光りがやいていた。

「父ちゃん、帰ってこい」

修平の声が **A** に変わっていた。ちいさな背中が震えている。誠吾は修平にむかつて歩き出した。誠吾の脇を追い越す人がいた。見ると、あの漁師の作造老人であった。

(葉名浜の釣り名人)

「修平」

作造が低い声で言った。

修平がふりむいた。

「作爺、父ちゃんは死んどりはせん。きつと帰ってくるの」

と顔を **B** 言った。

「泣くな」

「泣いとりはせん。作爺、父ちゃんを探しに行ってくれ。美作の船がすぐに父ちゃんを探しに行かんかったから……」

「それは違う。嵐の時に助けに行ったら美作の船も皆やられた。葉名島の漁師にそんな者はおらん」

「父ちゃんは死んどらんの。帰ってくるじゃろう、作爺」

「帰ってはこん」

「うそじゃ」

「うそじゃない」

「うそじゃ、わしが探しに行く。わしがひとりでも探しに行く」

「なら早う一人前になれ」

修平は作造に突進して行くと、黒い羽織りをつかんで作造の身体を殴りはじめた。畜生、畜生とつぶやきながら修平は作造の羽織りに顔を埋めて泣きはじめた。

誠吾は黙って海を見つめている作造のうしろ姿を見ながら、何も声をかけてやれない自分が口惜しかった。のどかな初夏の海に連絡船がゆつくりと進んでいた。そのおだやかな風景は誠吾にはひどく残酷に見えた。

(伊集院静『機関車先生』による)

問一 二重傍線の部分「オダヤカデ」を終止形にし、漢字一字と送り仮名に直せ。(送り仮名はひらがなで書くこと。)

問二 波線の部分 a 「ちいさな」・ b 「低い」・ c 「すぐに」・ d 「のどかな」の品詞の組み合わせとして最も適当なものの記号を書け。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|-----|---|-----|---|------|
| ア | a | 形容動詞 | b | 副詞 | c | 形容詞 | d | 連体詞 |
| イ | a | 連体詞 | b | 形容詞 | c | 副詞 | d | 形容動詞 |
| ウ | a | 形容動詞 | b | 形容詞 | c | 副詞 | d | 連体詞 |
| エ | a | 連体詞 | b | 副詞 | c | 形容詞 | d | 形容動詞 |

問三 空欄

A

 ・

B

 に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものの記号を書け。

- | | | | | |
|---|---|----|---|-----------|
| ア | A | 大声 | B | ここにこさせて |
| イ | A | 涙声 | B | ここにこさせて |
| ウ | A | 大声 | B | くしゃくしゃにして |
| エ | A | 涙声 | B | くしゃくしゃにして |

問四 傍線の部分①「ずっとうつむいたままでいた」とあるが、その時の修平の心情として最も適当なものの記号を書け。

- | | |
|---|-----------------------------------|
| ア | 父親はまだ生きていると信じているので葬儀を受け入れられないでいる。 |
| イ | 父親の葬儀に参列してくれた島の人たちに心から感謝している。 |
| ウ | 父親が死んで取り乱してはいけなさと懸命に我慢している。 |
| エ | 父親を亡くした悲しみに打ちひしがれている。 |

問五 傍線の部分②「目をむいて修平を見た」とあるが、その時の重太郎の心情として最も適当なものの記号を書け。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 同情 | イ | 動揺 | ウ | 憤慨 | エ | 後悔 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|

問六 傍線の部分③「早う一人前になれ」とあるが、そう言った時の作造の修平に対する心情として適当でないものの記号を書け。

ア 父親の代わりとして家族を支えることができるよう成長してほしい。

イ 大人としての物言いができるように常識を身につけてほしい。

ウ 悲しみを乗り越えていく精神的な強さを身につけてほしい。

エ 父親を越えるような腕のいい漁師になってほしい。

問七 傍線の部分④「作造の身体を殴りはじめた」とあるが、その時の修平の心情として適当なものを二つ選び、その記号を書け。

ア 父親の消息を知りながら本当のことを教えてくれない作造に不信感を抱いている。

イ 自分を子ども扱いした作造に成長した姿を見せつけようとしている。

ウ 父親を亡くしたやり場のない悲しみを信頼する作造にぶつけている。

エ 自分の苦しみを受け止めてくれない作造に怒りをあらわにしている。

オ 作造が父親を探しに行ってくれないことに不満を感じている。

問八 傍線の部分⑤「黙って海を見つめている作造」とあるが、その時の作造の心情として最も適当なものの記号を書け。

ア おだやかな海を眺めながら傷ついた自身の心を癒している。

イ 修平を落ち着かせることができると安心していている。

ウ 聞き分けのない修平の態度に困り果てている。

エ 修平の父親の死を修平と一緒に耐えている。

問九 傍線の部分⑥「そのおだやかな風景は誠吾にはひどく残酷に見えた」とあるが、その理由を五十字以内で書け。(句読点を含む。)

三 次の二つの文章〔Ⅰ〕・〔Ⅱ〕を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には省略した箇所がある。)

【Ⅰ】

寒明けが近づくと、心なしか日が長くなり、日射しも暖かみを増す。「陰きわまれば陽となる」というけれども、寒さも底を打ち、春到来の予感が膨らむころ、立春がやってくる。南宋の張栻(一一三三—一一八〇)は「立春偶成」と題する A でこう歌っている。

① 律回歳晩氷霜少

律回(めぐ)り歳(とし)く晩(ふ)れて 氷霜(ひょうそう)少(すく)なし

春到人間草木知

春(はる) 人間(じんかん)に到(いた)らば 草木(そうぼく)知る

便覚眼前生意満

便(すなは)ち覚(さ)ゆ 眼前(がんぜん)に生(せい)意(い)満(み)つるを

② 東風吹水緑参差

東風(とうふう) 水(みづ)を吹(ふ)き 緑(ろく) 参差(さんさ)たり

「暦めぐって年が暮れ、水や霜が少なくなった。春が地上にやってくると、まっさきに草や木がその気配を察知し、たちまちあたりに生気がみなぎってくるのが感じられる。東風が水面に吹きわたり、緑色をしたさまざまな波紋が浮かぶ」

ことほどさように、立春のころになると、じつと寒さに耐えながら、ひそかにエネルギーを蓄えていた草木がいつせいに生気を発散しはじめ、わが家のベランダに並べた鉢植えの植物群も、こぞっていきいきと春の息吹きを漂わせる。

寒さが人一倍こたえる身には、花の蕾が膨らむ春の訪れがことのほかうれしい。

近年とみに植物が好きになり、ベランダの鉢植えに毎日、水やりをしては、季節とともに変化するその姿を眺めるのが、無性に楽しい。

自然のめぐりは一陰一陽あるいは一陽来復^③。陰なる冬の寒さが極まると、一転して陽気が立ちのぼり、晴れやかな花の春がやってくる。暗いムードに覆われたこの不景気の時代も、そうあってほしいものだとつくづく思う。

(井波律子『一陽来復——中国古典に四季を味わう』による)

【Ⅱ】

『古今集』の四季は、春の胎動たいどうをうたう [B] の次の一首から開始される。

袖ひぢてむすびし水のこほれるを

春立つけふの風やとくらむ

「袖ひぢて」の「ひぢて」はぬらして。「むすびし水」の「むすぶ」は水をすくうこと。つまり、袖をぬらしてすくった水が凍っていたのを、春立つ [C] の風はとかすことであろうか、という意味になる。当時の立春は旧暦であるから、およそのところ立春と正月は重なっていた。

この歌が「袖ひぢてむすびし水の」と言っているのはいつの頃を指しているのかといえ、去年の「Ⅰ」、水辺でノウ涼ノウした時の思い出を指している。その折りに濡ぬらした袖の水が、「Ⅱ」を経て「Ⅲ」になり凍ってしまった（もちろんこれは心象の中の凍った水である）。が、その水も [C] 立春には [D] から吹いてくる「Ⅳ」風にとけてゆくであろうか、というのだから、いわばこの一首の中には、「Ⅰ」から「Ⅱ」、「Ⅲ」という季節のめぐりがうたわれていることになる。

現実にとけるのは「Ⅲ」の水だが、その氷の中には「Ⅰ」の思い出がとじこめられている。この歌で「Ⅳ」風がとき放はなつてくれるものは、凍った水だけではなく、その水にまつわって思い出されてくる去年の楽しかった「Ⅰ」の行楽の日々でもあるわけである。

（大岡信『おおかまこと』『うたの歳時記 第1巻 春のうた』による）

問一 二重傍線の部分ア「漂」・イ「覆」の読みをひらがなで書け。

問二 波線の部分「ノウ」の漢字と同じものの記号を書け。

ア 技芸をオサめる。

イ 発熱をオサめる。

ウ 勝利をオサめる。

エ 会費をオサめる。

問三 空欄 A に入る漢詩の形式として最も適当なものの記号を書け。

ア 五言絶句 イ 五言律詩 ウ 七言絶句 エ 七言律詩

問四 空欄 B に入る人物として最も適当なものの記号を書け。ただし、次の文章の筆者とする。

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれり《 X 》。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの、聞くものにつけて、言ひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざり《 X 》。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは、歌なり。

ア 松尾芭蕉 イ 藤原定家 ウ 西行法師 エ 紀貫之

問五 右の文章（「やまと歌は、……歌なり。」）の空所《X》に入る言葉をひらがな二字で書け。
ただし、「けり」を適当な形に活用させたものとする。

問六 空欄〔C〕に入る適当な言葉を和歌の中から抜き出し、漢字二字に直して書け。

問七 空欄〔D〕に入る適当な文字を文章〔I〕に引用されている漢詩の中から一字で抜き出して書け。

問八 空所「I」～「IV」に入る季節の組み合わせとして最も適当なものの記号を書け。

- | | | | | | | | | |
|---|---|---|----|---|-----|---|----|---|
| ア | I | 春 | II | 夏 | III | 秋 | IV | 冬 |
| イ | I | 夏 | II | 秋 | III | 冬 | IV | 春 |
| ウ | I | 秋 | II | 冬 | III | 春 | IV | 夏 |
| エ | I | 冬 | II | 春 | III | 夏 | IV | 秋 |

問九 漢詩「立春偶成」転句の書き下し文に用いられている表現技法として最も適当なものの記号を書け。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|-----|---|------|
| ア | 倒置 | イ | 比喩 | ウ | 擬人法 | エ | 体言止め |
|---|----|---|----|---|-----|---|------|

問十 傍線の部分①「春到人間草木知」・②「東風吹水緑参差」に返り点をそれぞれ付けよ。（①・②とも送り仮名は付けないこと。）

問十一 傍線の部分③「一陽来復」の意味を文章〔I〕の中から十字で抜き出し、そのまま書け。

